胆江日日新聞
2023年（令和5年）5月17日（水曜日）第26787号

利用者目線 大切に

JR東日本「Suica」開発担当者

水沢工高で進路講演会

県立水沢工業高校（小野寺訓校長、生徒361人）は15日、水沢佐倉河の市文化会館（Zホール）で進路講演会を開いた。JR東日本などが発行するICカード乗車券「Suica（スイカ）」の開発担当者で、JR東日本メカトロニクス㈱名誉顧問の椎橋章夫さんを招き、キャッシュレス決済の先駆けとも言えるSuicaの開発舞台裏を明かしながら、利用者の目線に立って物事を進める大切さなどを生徒たちに伝えた。

Suicaは2001年からサービス開始。IC（集積回路）を組み込んだカード、または同等の機能を持ったスマートフォンによって使える。現金またはクレジットカードで使用したい分の金額を登録（チャージ）し、自動改札機の読み取り部分にタッチすることで、運賃決済ができる。

自動改札機の普及が進んでいない本県においては、まだ「紙きっぷ」の利用が圧倒的に多いが、都市部ではJR以外にも私鉄や地下鉄、バスの料金決済にも対応。コンビニエンスストアや自動販売機での買い物の代金決済に関しては、交通機関がSuica非対応の地域でも利用できる。

Suica開発の舞台裏を紹介する椎橋章夫さん

「Super Urban Intelligent CArd（都会の高度な技術を駆使した最新鋭のカード）」の頭文字に由来する名称で、同時に「スイスイ行けるICカード」の意味合いを持たせている。カードやスマホを読み取り部分にかざす非接触型技術を利用しているが、「非接触」「スイスイ」といった利便性や言葉のインパクトが、椎橋さんら開発スタッフを悩ませる原因にもなった。

どんなに技術を高めたとしても、自動改札機の読み取り時間を「0秒」にすることは不可能。利用者に「かざしてください」と求めても、「かざす」という感覚はその人によってまちまち。そこで、飛行機が滑走路に接地後、再び離陸上昇する動作を指す航空用語「タッチ&ゴー」を、キャッチフレーズに導入。あえて、確実に読み取り部分に触れてもらう印象を与え、不具合なく着実な処理をできるようにした。

「技術によってどうしても乗り越えられないものは、運用面を思い切って変えるようなやり方もある」と椎橋さん。「使う側の目線になって開発することが重要で、これが本当のサービスというものだ」と強調。未来を担う生徒たちに、技術者として必要な心構えを説いた。